

さとうきび新品種「NiN 2」について

*福永公平・永富成紀・*前田浩敬・坂元 茂・故児玉三郎
(九州農業試験場・*農事試験場)

登録番号

さとうきび農林2号(系統名:KN 69-12)

来歴

昭和43年に南アフリカ糖業試験所において、「NCo 310」を母とし、「Co 331」を父として二親交配を行ない翌年その種子を九州農業試験場種子鳥試験地に導入・育苗し、以後、栄養系選抜によって育成したものである。47年より「KN 69-12」の系統名で配布して地域適応性を検討してきたが好成績が得られたので、52年5月に「さとうきび農林2号」に登録され、通称名を「NiN 2」と命名された。

形態的特性

草型は母本「NCo 310」に似た中垂葉であるが、葉身葉幅ともに大で、葉色はやや濃い緑色である。発芽性、

株出萌芽性にすぐれ、分けつ発生能力が高く初期生育が旺盛である。原料茎は短かいが太く、倒伏に強く、茎長が均一で脱葉性容易で、収穫時の省力機械化に適応した優良特性を備えている。茎型は円筒状で黄褐色であるが陽光を受けて紅褐色に呈色する。芽子は円型で芽涙を伴わない、中位の大きさで芽溝は存在しない。

生態的特性

蔗茎収量は、各栽培型ともに茎数型多収性を示し、とくに株出で良好な萌芽力により安定した多収をもたらす。糖分上昇はやや遅く晩熟性であるが、蔗汁は良質で生育期間が長い条件下ほど高糖・多収を示す。出穂は少なく、それに伴う側芽発生も遅いので、生葉量は後期まで多く確保され、登熟に資する同化能力が維持される。耐病虫性は第1表に示す以外の主要病虫種にも抵抗性を示し、加えて台風やかんばつ・豪雨など自然災害に抵抗性を備えて安全性が高い。

栽培上の注意

初期生育は極めて旺盛であるから、その生育が後期まで持続されるよう肥培管理を良くする必要がある。やや晩熟性で早期収穫は望ましくないので、作付に際し収穫期間の延長を考え、早中熟性品種を組合せて合理的に出荷を計画すること。

栽培適地および奨励品種採用県

本品種は冬期気温低下の少ない奄美大島以南の南西諸島に適応し、とくに萌芽不良、倒伏ならびに台風害を蒙り易い地帯あるいは収穫の機械化作業を推進している地帯に適する。現在、奨励品種採用県は鹿児島県である。

命名の由来

「NiN 2」は、日本(Nippon)で育成された2番目の品種で、南ア連邦ナタール州(Natal)での交配によることを表す。

第1表 一般特性 (九州農試)

| 品質 | | 品種名 | NiN 2 | NCo 310 |
|----------------------------|------------|-----|-------|---------|
| 収 量 性 | 原料茎長(cm) | | 170 | 196 |
| | 茎 径(cm) | | 2.20 | 2.06 |
| | 原料茎数(本/a) | | 1,149 | 1,064 |
| | 平均1茎重(g) | | 721 | 730 |
| | 原料茎重(kg/a) | | 831 | 771 |
| 蔗 汁 質 | ブリックス(%) | | 16.7 | 17.0 |
| | 糖 度(%) | | 13.4 | 13.8 |
| | 可製糖率(%) | | 9.65 | 10.05 |
| | 可製糖量(kg/a) | | 79.4 | 77.1 |
| 省 力 化 適 応 性 | 脱 葉 性 | | 中 | 難 |
| | 茎 の 均 一 性 | | 均一 | やや不整 |
| | 株 出 萌 芽 性 | | 強 | 中 |
| | 耐 倒 伏 性 | | 強 | 中強 |
| 耐 病 性 | 葉 焼 病 | | 中強 | 強 |
| | 葉 片 赤 斑 病 | | 強 | 中 |
| | モザイク病 | | 中 | 弱 |

注) 調査年次は、昭和47~50年の4カ年平均。